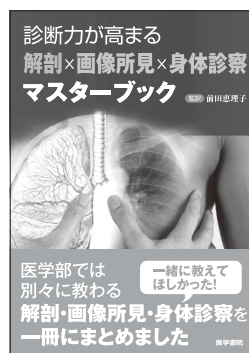


Sagar Dugani, Jeffrey E. Alfonsi, Anne M. R. Agur, Arthur F. Dalley : 編,
前田恵理子 : 監訳

診断力が高まる 解剖×画像所見×身体診察 マスターブック

評者

志水 太郎 (獨協医科大学主任教授・総合診療医学)



●基礎と臨床をつなぐ素晴らしい着眼点の本

この本は「ありそうでなかった」画期的な視点の本であり、基礎と臨床をつないでくれる有意義な書籍だと思います。4人の編者のうち、クリニカルフェローが2人という(カナダ、米国)チーム編成が、北米大陸の教育層の厚さを物語ります。また、NEJMのClinical Problem Solvingでおなじみの Joseph Loscalzo 先生(Harvard/Brigham チーム)も参画して書かれた臨床解剖の本です。原著のサブタイトルはフィジカルと画像の integration ということで、邦題もその本質を見事に翻訳された「解剖×画像所見×身体診察」となっています。

本書は、核となる Chapter 1「臨床での統合的アプローチ」、そしてそれに続く Chapter 2 からの各論からなります。それぞれの各論の章は基礎医学というよりはむしろ、より臨床的な事項がメインになった構成であり、そこに画像所見と解剖図譜がバランスよく配置されていて、臨床画像には慣れない低学年の学生でもスムーズな形で画像の読み方について解剖を基礎として学

ぶことができる構成と思います。各論の章は、症例を基にしながら、「初期評価」「器官系の概要」「症例集」という3段階構成になっていて、スムーズに基礎→臨床の学習に入っていくことができます。

しかし何といってもこの本で秀逸なのは Chapter 1 でしょう。「統合的な医学アプローチへの導入」という見出しから始まり、ある症例を提示され、医師がどのように考え、何を観察し、どのようなことに気を配るのか、ということが丁寧に書かれています。おそらく医学部低学年者を対象としたようなスタートですが、2ページ目からは身体診察、数ページにわたるバイタルサインの記載へとつながり、所見と解剖学的な表現の記載、さらに症例が進み画像検査の説明とその所見、そして検査の結果の病態生理と結果の科学的解釈(感度・特異度)まで触れています。1つのケースからこのように有機的に学ぶ、という学び方のお手本のよう構成になっています。本書評の冒頭で、なかなかこのような書籍はないと述べたのは、特にこの Chapter 1 のような、「ありそうでなかなかない」内

容の展開からです。

評者は臨床系の大学教員である一方、基礎医学(解剖学)の教壇に立つこともあり、臨床の観点から基礎に触れるということを教員の側から実感する立場の医師です。例えば、先日の授業や実習ではまさに、学生の古くからのニーズである基礎と臨床が直結したような勉強がしたいという声を肌で感じました。かくいう自分も、十数年前に英国の医学部に留学させていただいた折、臨床医学の実習やミニレクチャーが常に基礎医学の知識に戻って教えられていた教育現場を現地で見て同様の想いを強くした経験があり、その記憶からも、本書を手にしてその悩みに一条の光が差したような気がして、とてもうれしい気がしました。

訳も自然でとても読みやすいです。特に低学年の学生、そして、医学教育をどのように教えようかと悩む教員の先生方にも大推薦の1冊です。

B5 頁 408 2018年9月 医学書院刊
定価: 本体 5,800 円 + 税
[ISBN978-4-260-03627-6]